

【個人研究】

大学生とその父母の子ども観および父親・母親イメージの 時代推移

本 田 時 雄*

On Chronological Changes of How Children are Viewed and the Images of Father and Mother in Adolescents and Their Parents

Tokio HONDA

This study aimed to examine chronological changes of the view of child and the image of father and mother in adolescents and their parents in 1997 and 2000 with the method of factor analysis.

Distinguished results were as follows:

- 1) Concerning the view of child; Respondents in 2000 had various views perhaps because they had more factors than in 1997. Fathers, especially in 2000 had cool and strict views about child.
- 2) Regarding the images of father and mother; Adolescents and their parents were almost the same except adolescent's image about father in 1997, and in 2000 adolescent's images of father and mother were different from their parents in 2000. Adolescents' parents had the same images of father and mother in the both years. Adolescents had the image of father and mother who were very keen on education because respondents in 2000 experienced 1980s "of prosperity" and the bursting of bubble .

はじめに

発達研究は、従来年齢を中心に行われてきたが、明治時代の20歳と現代の20歳ではほぼあらゆる点でまったく異なっている。これは社会的環境とくに時代性によると考えられる。ライフコース論は社会学から生まれたが、時代性はアーカイブデータを用いるなどして取り込まれており、わが国ではアーカイブデータがほとんど無い状態である。

青年とその父母のさまざまな関係について、

Fig. 1のようなデザインで定点観測によるペアデータの収集を1995年から始め、分析を1996年から開始してきた。これまで3者の自己評価（中学時代、現在）の関係を中心に解析・検討し、解析法に関して一応の目安がついた。今回は大学生とその父母の子ども観と親イメージ観の関係を検討した。

方 法

対象

調査1：埼玉県B大学の学部学生 93名（男子22名、女子71名：平均19.32歳）とその父（49.43歳）と母（46.81歳）。

* ほんだ ときお 文教大学人間科学部臨床心理学科

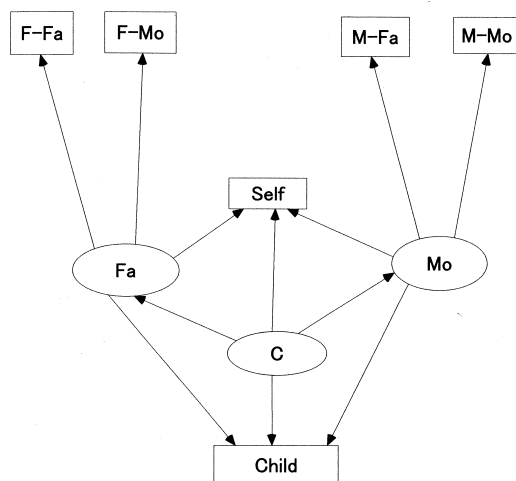


図1

注1 ○ 回答者

C:青年(大学生) Fa:父親、Mo:母親

2 □ 評定対象

Child:子ども、Self:中学時代と現在の自分、

F-Fa -Mo:父方の祖父、

M-Fa -Mo:母方の祖父

Table1 子ども観の質問項目

- C 1 子どもは天からの授かりもの。
 C 2 自分が働けなくなったとき、わが子に面倒をみてもらいたい。
 C 3 子どもがいると夫婦の間に問題をたくさん引きおこす。
 C 4 女性は母親になって初めて完成される。
 C 5 男性は父親になって初めて完成される。
 C 6 夫婦が子どもを欲しいと思うのは当然である。
 C 7 子どもを産み育てるのは社会に対する義務だ。
 C 8 子どもの存在によって、家の中で自分の位置が定まるような気がする。
 C 9 子どもには親のかなえられなかったことをやらせたい。
 C 10 親には親の世界が、子には子の世界がある。
 C 11 子どもがいると自分の自由な行動が制限される。
 C 12 子どもが自分を必要だと感じてくれるだけでも生きている甲斐がある。
 C 13 子どもがほめられたとき、自分もほめられた気になる。
 C 14 子どもを産んで育てるのは女性の一つのつとめである。
 C 15 人生で大事なことは子どもを育てて初めて経験できる。
 C 16 子どもがいて初めて社会的に家庭といえる。
 C 17 夫婦にとって子どもができるのは自然である。
 C 18 子どもの世話には精神的・肉体的に疲れる。
 C 19 子供を作るのは結婚の重要な意義の一つである。
 C 20 子どもの成長こそ最大の喜びである。
 C 21 子どもがいることで、夫婦の危機が救われることがある。
 C 22 子どもを育てることも自己の成長につながる。
 C 23 子どもがいれば、死後も自己の分身が生きていると感じることができる。
 C 24 子どもは夫婦の結びつきを一層強める。
 C 25 子どもを残すことで、自分が生きた証拠を残せる。
 C 26 子どもがどのような道を選ぼうと、それを認めてやりたい。
 C 27 子どもがいることは大きな張り合いである。
 C 28 生活水準を落としてまで子どもを持つとは思わない。
 C 29 人間である以上、自分の子どもを持ててみたい。

Table2 父親(母親)イメージの質問項目

- P 1 あたかい
 P 2 相談相手になる
 P 3 信頼できる
 P 4 思いやりがある
 P 5 服従的
 P 6 あなたを信頼している
 P 7 子育てに熱心
 P 8 しつけが厳しい
 P 9 あなたに頼っている
 P 10 あなたを私物化している

調査2: 調査1と同じB大学の学部学生109人(男子24名、女子85名:平均19.50歳)とその両親(父51.34歳、母48.18歳)。

手続き

対象1は1998年7月、対象2は2003年7月、受講生に、子ども用、父親用、母親用の3種の封筒のに入った大封筒を渡して両親に回答してもらうように依頼した。もし親と別居の場合は、郵送料を立て替えてもらい、後から支払った。

1. 尺度: 子ども観: 女性の生活史研究会が1981年に作成した子どもの価値観に関する質問紙23項目を参考にして29項目の質問紙を作成し、使用した。

父親・母親に関するイメージ: 父親、母親ともに当てはまるような形容語対の10対を作成して、用いた。

2. データの処理: 各項目を5段階評定してもらい、1点から5点までに数量化し、子ども観に関しては因子分析(主因子法 + varimax回転)を行った。父母に対する評定に関しては因子分析(主成分分析 + varimax回転)を行った。因子負荷量の絶対値が.400以上の項目を採用した。

調査1

1. 子ども観（49項目）:

1) 大学生；累積寄与率52.422%で4因子が抽出された。第1因子は「女性は母親になって初めて完成されるc4」「男性は父親になって初めて完成されるc5」「人生で大事なことは子どもを育てて初めて経験できるc15」「子どもを生んで育てるのは女性の一つのつとめであるc14」など9項目で、＜社会規範としての子＞因子と命名された。第2因子は「子どもがいることで夫婦の危機が救われたことがあるc21」「子どもを育てることも自己の成長につながるc22」「子どもが自分を必要だと感じてくれるだけでも生きている甲斐があるc12」など9項目で＜生き甲斐としての子＞因子と名づけられた。第3因子は「子どもを残すことで自分が生きた証拠を残せるc25」「子どもがいれば死後も自己の分身が生き続けていると感じることができるc23」など3項目で＜分身としての子＞因子と命名された。第4因子

は「子どもがいると自分の自由な行動が制限されるc11」「子どもがいると夫婦の間に問題をたくさんひきおこすc3」の2項目で＜枷・お荷物としての子＞因子と命名された。

この因子構造は2項目だけが第1因子と第2因子に重複しているだけで、ほぼ単純構造と呼べよう。なお「c4」と「c5」はこのプロジェクトのために付加された新しい項目である。

2) 父；大学生と同様に4因子が抽出され、53.470%が説明された。第1因子は「夫婦にとって子どもができるのは自然であるc17」「夫婦が子どもを欲しいと思うのは当然であるc6」「子どもがいて初めて社会的に家庭といえるc16」など10項目で、＜自然・社会的存在としての子＞因子といえよう。＜社会規範としての子＞因子と類似している。第2因子は「子どもを育てることも自己の成長につながるc22」「子どもは夫婦の結びつきを一層強めるc24」「子どもがいることは大きな張り合いであるc27」など7項目で＜生き甲斐としての子＞因子と命名された。

Table3 大学生の子ども観(1997年)

	因子1	因子2	因子3	因子4
CG1_4	.806	-2.788E-03	.208	.243
CG1_5	.805	-9.713E-02	.200	.243
CG1_15	.762	.238	.236	-7.651E-02
CG1_14	.651	.417	5.466E-02	-.117
CG1_16	.645	.176	.104	-.186
CG1_7	.628	.216	.131	-.151
CG1_6	.530	.345	.180	-.148
CG1_19	.516	.340	.110	-7.993E-02
CG1_20	.507	.476	.114	-.102
CG1_21	.228	.712	4.495E-02	-6.499E-02
CG1_22	.243	.682	-4.536E-02	2.651E-02
CG1_12	.261	.663	.236	5.518E-03
CG1_24	.302	.632	.294	-.172
CG1_27	.326	.626	.203	-6.296E-04
CG1_26	-.232	.587	-7.918E-03	.148
CG1_29	.355	.544	.118	-.130
CG1_13	.180	.541	.150	4.706E-02
CG1_10	-8.652E-02	.492	.142	.290
CG1_25	.224	.172	.800	-7.542E-02
CG1_23	.190	.147	.759	-7.023E-02
CG1_1	.275	.257	.445	6.122E-02
CG1_11	-2.687E-02	8.917E-03	8.635E-02	.638
CG1_3	4.454E-02	-1.299E-02	-4.066E-02	.632
CG1_18	-.180	.105	-.312	.614
固有値	8.121	2.680	2.621	1.563
回転後の負荷量平方和	4.711	4.286	1.993	1.592
寄与率	19.628	17.857	8.302	6.635

Table4 父の子ども観(1997年)

	因子1	因子2	因子3	因子4
FC1_17	.714	.139	3.597E-02	-8.204E-02
FC1_6	.712	.259	4.649E-02	6.436E-02
FC1_16	.706	.254	.328	.154
FC1_15	.685	.220	.316	.124
FC1_7	.627	.225	.231	.292
FC1_19	.584	.185	.227	.163
FC1_14	.556	8.045E-02	.359	.115
FC1_5	.550	.332	.411	5.432E-02
FC1_29	.522	.307	-3.255E-02	7.935E-02
FC1_8	.462	.291	.313	.185
FC1_22	.194	.699	.201	-.155
FC1_24	.370	.656	2.110E-02	.305
FC1_27	.463	.643	-.103	9.155E-02
FC1_21	.136	.607	.220	5.301E-02
FC1_12	.404	.574	-5.431E-02	.263
FC1_20	.381	.572	-3.580E-02	.323
FC1_13	.484	.523	-.190	.116
FC1_18	.193	3.072E-02	.690	-.119
FC1_11	9.622E-02	.229	.622	6.936E-02
FC1_4	.419	.191	.600	-4.272E-02
FC1_3	-5.781E-02	-2.897E-02	.507	.103
FC1_28	.181	-.143	.507	8.871E-03
FC1_23	.115	.272	.131	.819
FC1_25	.270	.317	.195	.773
FC1_10	-2.869E-02	.264	.168	-.0420
固有値	9.136	2.694	1.789	1.549
回転後の負荷量平方和	5.114	3.567	2.675	2.012
寄与率	20.454	14.268	10.701	8.047

Table5 母の子ども観(1997年)

	因子1	因子2	因子3	因子4
MC1_27	.744	.287	.195	7.461E-03
MC1_22	.675	3.230E-02	.218	.108
MC1_13	.642	.150	3.116E-02	.273
MC1_24	.639	.141	.307	90720E-02
MC1_21	.625	.261	.142	.301
MC1_12	.562	.290	.117	5.977E-02
MC1_25	.514	.266	.414	.214
MC1_23	.468	.284	.164	3.833E-02
MC1_17	2.708E-02	.744	5.250E-02	.222
MC1_6	.257	.657	.325	6.970E-02
MC1_14	.394	.654	.232	.182
MC1_19	.378	.609	.212	.298
MC1_15	.228	.570	.437	.267
MC1_20	.547	.566	5.499E-02	.216
MC1_29	.372	.496	.231	-3.660E-02
MC1_7	.248	.418	.396	6.058E-02
MC1_5	.267	.203	.817	.215
MC1_4	.233	.227	.816	.165
MC1_16	.144	.448	.499	.243
MC1_18	2.150E-02	.113	1.101E-02	.645
MC1_3	5.749E-02	.202	.326	.558
MC1_28	.273	2.917E-02	8.379E-02	.508
MC1_11	9.003E-02	.123	7.586E-02	.435
MC1_9	.145	7.129E-02	.380	.432
固有値	9.685	1.909	1.654	1.466
回転後の負荷量平方和	4.188	3.646	3.054	2.029
寄与率	17.449	15.191	12.725	8.454

子>因子と命名された。第3因子は「子どもの世話は精神的・肉体的に疲れるc18」「c11」「c4」など6項目で<枷・お荷物としての子>因子と命名されよう。第4因子は「c23」「c25」「親には親の世界が、子には子の世界があるc10」の3項目から成り<分身としての子>因子と命名された。

3) 母; 累積寄与率53.818%で4因子が抽出された。第1因子は「c27」「c22」「子どもがほめられたとき自分もほめられた気になるc13」など9項目で、<生き甲斐としての子>因子として命名された。第2因子は「c17」「c6」「c14」など9項目で<社会規範としての子>と命名されよう。第3因子は「c5」「c4」「c16」など6項目から成り、<自己完成としての子>因子と命名され、第4因子は「c18」「c3」「生活水準を落としてまで子どもを持つとは思わないc28」など5項目で<枷・お荷物としての子>因子といえよう。第3因子に他の因子と重複する項目が4項目、第1因子と第2因子に重複する項目も1項目あった。

母の因子構造は大学生と類似していた。す

なわち大学生の第1因子と母の第3因子、大学生の第2因子と母の第1因子、大学生の第3因子と母の第3因子、両者の第4因子は項目やその順序が多少異なっていたが、同じ因子名を付けた。

2. 親に対する評定(10項目):(主成分分析を行い、2因子以上抽出された場合にvarimax回転を行った)

1) 子ども: 父親として; 寄与率59.45%で3因子が抽出された。第1因子は「あたたかいp1」「思いやりがあるp4」「信頼できるp3」など5項目で、<慈父>因子と命名した。第2因子は「あなたを私物化しているp10」「服従的p5」「あなたに頼っているp9」など4項目で<独占・しがみつきの子>因子と命名されよう。第3因子は「相談相手になるp2」と「しつけが

Table6 大学生の父親イメージ(1997年)

	因子1	因子2	因子3
CF3_1_1	.905	2.340E-02	-3.575E-02
CF3_1_4	.902	-7.193E-02	2.780E-02
CF3_1_3	.639	1.982E-02	.516
CF3_1_7	.583	.138	.458
CF3_1_6	.533	-.122	.229
CF3_1_10	-3.657E-02	.740	-.154
CF3_1_5	-.176	.710	2.760E-02
CF3_1_9	9.822E-02	.584	7.658E-02
CF3_1_2	.150	-.203	.795
CF3_1_8	4.477E-02	.460	.578
固有値	3.186	1.714	1.045
回転後の負荷量平方和	2.732	1.685	15.280
寄与率	27.317	16.852	15.280

Table7 大学生の母親イメージ(1997年)

	因子1	因子2
CF3_1_1	.892	-8.359E-02
CF3_1_3	.869	8.879E-02
CF3_1_4	.839	7.883E-02
CF3_1_2	.753	-.108
CF3_1_6	.737	4.689E-02
CF3_1_7	.505	.487
CF3_1_8	.107	.691
CF3_1_9	.230	.674
CF3_1_10	-.257	.656
CF3_1_5	-9.401E-02	.525
固有値	3.800	1.869
回転後の負荷量平方和	3.759	1.911
寄与率	37.586	19.106

厳しいp8」など4項目で<厳父>因子と命名された。この因子は、第1因子と2項目、第2因子と1項目重複していた。

母親として；2因子が寄与率56.70%で抽出された。第1因子は「p1」「p3」「p4」などの6項目で<慈母>因子。第2因子は「p8」「p9」「p10」など5項目で、<独占・しがみつiki>因子と命名した。この分析における第1因子は父親としての分析の第1因子と、第2因子は父親としての第2因子と類似していた。またこの因子構造は重複している項目が何も無く単純構造であった。

2) 父：父親として；累積寄与率65.94%で2因子が抽出された。第1因子は「p4」「p1」「p3」など6項目で、因子負荷量の多少の順序はやや異なるけれども子どもの父親としての

分析ときわめて類似した因子と考えて<慈父>因子と命名した。第2因子は「p9」「p10」「p5」など5項目で、子どもの父親としての第2因子と同じであり<独占・しがみつiki>因子と命名されよう。なお「相談相手になるp2」の因子負荷量が両因子ともに大であった。

母親として；2因子が抽出された（寄与率58.85%）。第1因子は「p3」「p1」「p4」など7項目で、これまでの第1因子と同様に<慈母>因子と命名した。第2因子は父親の第2因子と同じであった。「p8」「p10」「p9」など5項目で、子どもの母親としての第2因子と同じであり<独占・しがみつiki>因子である。p8の因子負荷量は両因子ともに大であった。

3) 母：父親として；寄与率66.78%で、2因子が抽出された。第1因子は「p4」「p3」「p1」など7項目で<慈父>因子。第2因子は「p10」「p5」「p9」「p8」の4項目で<独占・し

Table8 父の父親イメージ(1997年)

	因子1	因子2
FF3_1_4	.919	9.209E-02
FF3_1_1	.909	8.003E-02
FF3_1_3	.841	8.846E-02
FF3_1_6	.723	.112
FF3_1_7	.718	.364
FF3_1_2	.655	.429
FF3_1_9	.183	.853
FF3_1_10	.110	.831
FF3_1_5	1.041E-02	.746
FF3_1_8	.334	.517
固有値	4.760	1.834
回転後の負荷量平方和	4.001	2.593
寄与率	40.010	25.930

Table9 父の母親イメージ(1997年)

	因子1	因子2
FM3_1_3	.906	-.112
FM3_1_1	.868	-.146
FM3_1_4	.861	-8.398E-02
FM3_1_6	.676	.118
FM3_1_2	.659	.282
FM3_1_7	.647	.110
FM3_1_8	.447	.408
FM3_1_9	5.147E-02	.837
FM3_1_10	-.186	.817
FM3_1_5	9.662E-02	.574
固有値	3.888	1.996
回転後の負荷量平方和	3.874	2.011
寄与率	38.740	20.106

Table10 母の父親イメージ(1997年)

	因子1	因子2
MF3_1_4	.887	2.114E-02
MF3_1_3	.834	5.772E-02
MF3_1_1	.807	3.615E-02
MF3_1_6	.804	.122
MF3_1_7	.715	.433
MF3_1_2	.693	.322
MF3_1_10	.134	.873
MF3_1_5	-.205	.781
MF3_1_9	.354	.780
MF3_1_8	.404	.515
固有値	4.744	1.934
回転後の負荷量平方和	4.120	2.558
寄与率	41.201	25.580

Table11 母の母親イメージ(1997年)

	因子1	因子2
MM3_1_3	.919	3.608E-02
MM3_1_2	.912	.148
MM3_1_4	.911	.3851E-02
MM3_1_1	.837	7.415E-02
MM3_1_6	.789	.145
MM3_1_7	.722	.277
MM3_1_10	-4.452E-02	.832
MM3_1_9	4.972E-02	.795
MM3_1_5	.172	.728
MM3_1_8	.343	.480
固有値	4.796	1.919
回転後の負荷量平方和	4.502	2.213
寄与率	45.019	22.132

がみつき> 因子と命名した。父親としての場合と同様にp8が両因子ともに負荷量が大であった。

母親として；2因子が抽出された（寄与率67.15%）。第1因子、第2因子とも因子負荷量の大きさなどは異なるが、因子構造は父親としての場合ときわめて類似しており、第1因子は<慈母>因子、第2因子は<独占・しがみつき>因子と命名されよう。重複する項目は無く、単純構造であった。

調査2（2003年）

調査1と同様な手続きに従って、Table2のような結果が得られた。

まとめ

子ども観：

1. 1997年では、大学生とその父母はいずれも4因子が抽出され、かつその因子の種類もかなり類似していた。これに対して2000年では、大学生が6因子、母が5因子および父が4因子とバラバラで、その内容も大学生が自己成長と自己完成、母が喜びの源、父が親と別個の世界の存在というように子どもを観ていた。
2. 2000年の回答者は、1997年の回答者よりも因子の数が多く抽出されたので、子ども観や父母のイメージに多様性のあると考えられる。
3. 父、特に2000年の父は、1997年の父よりも現実的でクールであることが抽出された因子数やその内容から推測できる。

父・母イメージ：

1. いずれの年の父母は2因子ともほぼ同じ内容であった（慈父・慈母、しがみつき・独占）
2. 1997年の大学生は父親を第3因子で厳父と、2000年の大学生は父親を第3因子で教育パパとまた母親を第2因子で教育ママと捉えていた。教育パパ・教育ママに関しては、20歳前

後の大学生は経済の高度成長期である1980年代さらに父親の権威が弱まり始めたバブル崩壊の1990年代に成長しており、高学歴による上昇志向を強いられたのかもしれない。

引用・参考文献

朝日新聞社 1985 - 2000 朝日年鑑

本田時雄・岡林秀樹 2000 ペアデータを分析の試み（2）- 共分散構造分析を用いた世代間伝達の分析事例 - 文教大学人間科学研究、第22号、219 - 226

本田時雄 2003 高校生とその父母の自己認知の関心の関する分析の試み 沖縄の場合 文教大学生活科学研究、第25号 41 - 49

女性の生活史研究会 1981 いま女性は 福村出版
木下由美・亀口憲治 1998 ウィグル族と日本の家族イメージの比較研究 - 両親イメージの差異 - 家族心理学研究、第12巻、41 - 52

木下由美・亀口憲治 1999 中学2年生の家族イメージの研究 - 父・母・子の3者関係のイメージ - 家族心理学研究、第13巻、1 - 13

Table12 因子分析のまとめ

1997年		子ども観				
大学生 父 母	F1 社会規範としての子 自然・社会的存在としての子 生き甲斐としての子	F2 生き甲斐としての子 生き甲斐としての子 社会規範としての子	F3 分身としての子 枷・お荷物である子 自己完成としての子	F4 枷・お荷物である子 分身としての子 枷・お荷物としての子	F5 自然的存在である子 枷・お荷物である子	F6 枷・お荷物である子
大学生 父 母	F1 慈父 慈母 慈父 慈母 慈父 慈母	F2 しがみつき 独占・しがみつき 独占・しがみつき 独占・しがみつき 独占・しがみつき 独占・しがみつき	F3 厳父	親イメージ		
2000年	F1 自己成長としての子育て 社会規範としての子 社会規範としての子	F2 自己完成としての子 生き甲斐としての子 生き甲斐としての子	F3 社会規範としての子 枷・お荷物である子 社会規範+分身としての子	F4 分身としての子 親と別個の世界の子 喜びの源としての子	F5	F6
大学生 父 母	F1 慈父 慈母 慈父 慈母 慈父 慈母	F2 独占・しがみつき 教育ママ 独占・しがみつき しがみつき 独占・しがみつき 独占・しがみつき	F3 教育パパ 独占・しがみつき	親イメージ		